

In Vivo Imaging of Radial Keratoneuritis in Patients with Acanthamoeba keratitis by Anterior-Segment Optical Coherence Tomography

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: 金沢大学
URL	http://hdl.handle.net/2297/43531

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文の内容要旨

主論文題名：In Vivo Imaging of Radial Keratoneuritis in Patients with Acanthamoeba keratitis by Anterior-Segment Optical Coherence Tomography.

Ophthalmology 第121巻第11号 2153頁～2158頁
平成26年11月掲載

専攻部門 脳医科学系専攻視覚科学
氏 名 山崎 奈津子
(主任教員 杉山和久教授)

アカントアメーバ角膜炎は1970年代中期に初めて報告された。最近では主にソフトコンタクトレンズの不適切使用による感染がほとんどで増加傾向にある。アカントアメーバ角膜炎は初期診断が特に困難で、しばしばヘルペス感染症等との鑑別が難しい。初期アカントアメーバ角膜炎患者の細隙灯顕微鏡で観察される放射状角膜神経炎はアカントアメーバ角膜炎に特徴的な所見である。しかし、放射状角膜神経炎の所見自体も発見がやや困難で臨床経験を要する。

今回、初期アカントアメーバ角膜炎と診断された4例4眼（男性2症例、女性2症例、平均年齢28.5歳）における放射状角膜神経炎をハイデルベルク社の前眼部光干渉断層計（OCT）を用いて観察した。全症例とも、培養検査とレーザー共焦点顕微鏡でアカントアメーバシストや栄養体を確認してアカントアメーバ角膜炎と診断した。原因は2週間もしくは1ヶ月頻回交換ソフトコンタクトレンズの不適切購入や使用によるものであった。レーザー共焦点顕微鏡では角膜実質に高輝度の活性化した蜂の巣状のケラトサイトを認め、また放射状角膜神経炎の周囲には高輝度の紡錘状の物質や斑状所見を認めた。全症例、細隙灯顕微鏡で放射状角膜神経炎をみとめ、前眼部OCTでは、細隙灯顕微鏡で観察された放射状角膜神経炎の部位に一致した、50-200 μm の高輝度線状または帯状で層に平行で比較的境界明瞭な像を認めた。実質の深さは症例により様々であった。治療は角膜上皮搔刮、抗真菌薬内服、抗真菌薬点眼、消毒液点眼を行い、全症例経過良好であった。全症例で治療後には放射状角膜神経炎は消失し、前眼部OCTでも高輝度部位は薄くなり、消失傾向にあった。

アカントアメーバ角膜炎に特徴的な所見である放射状角膜神経炎は発生機序や詳細について解明されておらず、本研究がその糸口になる可能性がある。さらに放射状角膜神経炎の発生機序や詳細が解明されれば、アカントアメーバ角膜炎の特効薬の発見につながる可能性もある。またアカントアメーバ角膜炎は早期発見し、初期の段階で治療を開始することが重要であるが、初期診断は困難であることもあり、前眼部OCTによる本所見がアカントアメーバ角膜炎の初期診断と治療効果判定に有効であると考えられた。前眼部OCTは非接触で、非侵襲的に素早く観察することが可能であることから、診断・治療等、臨床においてさらなる応用が示唆される。